

令和4年度

# 大阪老人福祉施設 研究大会

実施報告書



令和4年度  
大阪老人福祉施設研究大会 実施報告書

発行 令和5年5月  
企画・編集・発行  
社会福祉法人  
大阪府社会福祉協議会 老人施設部会  
「福祉介護人材対策プロジェクト」

〒542-0065  
大阪市中央区中寺 1-1-54 大阪社会福祉指導センター内  
TEL:06-6762-9001 FAX:06-6768-2426



<http://www.a-kaigo.gr.jp>

令和5年 2月13日・2月14日

# はじめに

少子高齢化の急速な進展や、高齢人口が増加するなか、高齢者が自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるよう、地域の包括的な支援・サービス提供体制(地域包括ケアシステム)の構築が求められており、特別養護老人ホーム等の高齢者施設においては、重度の要介護高齢者の終末期を含めた、暮らしを支える機能の充実とケアの質の向上が期待されています。

大阪府社会福祉協議会 老人施設部会は、毎年、会員施設間の取り組みの共有や職員育成を目的に、大阪老人福祉施設研究大会を開催しており、平成30年度からは発表スタイルをプレゼン方式で行う「ジョブズスタイル」に変更し、先進的な取り組み、現場のカッコ良さを正しく伝える工夫を行っています。令和4年度は、グランフロント大阪のナレッジシアターを会場に、集合開催に加えYoutubeライブ配信により、福祉・介護実践や研究、地域貢献、SDGs、企業や学生とコラボした取り組みなど、27のテーマについて発表がありました。このたび、これらの取り組みについて福祉関係者をはじめ教員や学生などたくさんの人に知っていただくこと、多様な活動・研究が促進され、豊かな実践が広がることを目的に、実施報告書を作成しました。発刊にあたり、準備を尽くされた発表者や施設関係者、コメンテーターとしてご参画いただきました学識者、広報・周知にご協力いただきました関係者の方々、研究大会の企画や運営に携わった皆さんに厚く御礼申し上げます。



発表者一覧					
	法人名	施設名	発表者	発表テーマ	コメンテーター
1	社会福祉法人 聖徳会	特別養護老人ホーム 大阪老人ホームうえだ	森 雅之	みんなの笑顔がみたいから	大阪人間科学大学 人間科学部社会福祉学科 秦 康宏 准教授
2	社会福祉法人 そうび会	特別養護老人ホーム つるぎ荘	平岡 和美	特別養護老人ホームでの軟飯の導入 ～半粥から軟飯への移行～	
3	社会福祉法人 大阪府社会福祉事業団	特別養護老人ホーム 高槻荘	川路 弥恵子 山下 正広	腸内フローラアップチャレンジ! ～多職種協働で取り組んだ200日～	関西大学 人間健康学部人間健康学科 種橋 征子 准教授
4	社会福祉法人 そうび会	特別養護老人ホーム つるぎ荘	山岡 亜紀	特別養護老人ホームでの誤嚥性肺炎予防の取り組み ～摂食嚥下評価、多職種カンファレンスを開始して～	
5	社会福祉法人 ライフサポート協会	特別養護老人ホーム なごみ	上村 淳	NO 面会, NO LIFE!	関西福祉科学大学 社会福祉学部社会福祉学科 家高 将明 准教授
6	社会福祉法人 みささぎ会	特別養護老人ホーム 大仙もずの音	藤本 耕介	認知症高齢者にやさしい住まい作り	
7	社会福祉法人 そうび会	特別養護老人ホーム つるぎ荘	渡邊 美恵	特別養護老人ホームでの褥瘡予防の取り組み ～体位変換に加え、エアマットレスをシステムティックに導入した報告～	四天王寺大学 教育学部教育学科 吉田 祐一郎 准教授
8	社会福祉法人 みささぎ会	グループホーム つどうホール	宮田 恒志	グリーンカーテンでエコ活動 ～みささぎ版SDGsの取り組み～	
9	社会福祉法人 蒼生福祉会	特別養護老人ホーム 南郷の里	宮中 久美 ダイキン工業(株) 和田 萌	空調メーカーと協同空調省エネ運用の自動化で電気代削減と、省エネ大賞受賞後のチームカUP	大阪人間科学大学 人間科学部社会福祉学科 武田 卓也 教授
10	社会福祉法人 秀幸福社会&追手門学院	特別養護老人ホーム 庄栄エルダーセンター	追手門学院中・高等学校ユネスコ国際研究部	「中高生、地域のハブへの挑戦」	
11	社会福祉法人 秀幸福社会	いきいきネット 相談支援センターエルダー	神野 享士	古き良き時代を思い出して ～UR団地住民の心と体の活性化を目指して～	大阪人間科学大学 人間科学部社会福祉学科 武田 卓也 教授
12	社会福祉法人 豊悠福祉会	祥雲館	山根 奈々 落谷 菜摘 鈴木 るうな	福祉のチカラで街を元気に! 過疎地域「豊能町」で良質な地域コミュニティを作りたい	
13	社会福祉法人 和悦会	浜特別養護老人ホーム	中本 裕司 豊田 小町	浜特養のヒーロー参上!! ～浜特養のヒーローの存在になるべく、若手職員の日々の活動をお届けします～	大阪人間科学大学 人間科学部社会福祉学科 武田 卓也 教授
14	社会福祉法人 成光苑	デイサービスセンター せつつ桜苑	櫻田 愛	認知症のご利用者に対する学習療法の効果について ～前頭前野への刺激で認知機能を改善しよう～	
15	社会福祉法人 ライフサポート協会	特別養護老人ホーム なごみ	兼田 浩也	看取りから学んだ、人生の幕引きのお手伝い	大阪人間科学大学 人間科学部社会福祉学科 武田 卓也 教授
16	社会福祉法人 天心会	特別養護老人ホーム ヴェルディ八戸ノ里	鈴木 嘉剛 大上 幸子 吉田 奈緒子	ヴェルディ八戸ノ里でのICTの導入により得られた結果とその考察	
17	社会福祉法人 悠人会	特別養護老人ホーム ベルアルプ	鈴木 隆宏	ユニット活動目標の実現に向けて	大阪健康福祉短期大学 介護福祉学科 鴻上 圭太 教授
18	社会福祉法人 あゆみ会	特別養護老人ホーム アンパス東大阪	西川 真依 北川 かおる	集まれ! 喫茶 なごみへ ～みんなの憩いの場～	
19	社会福祉法人 ライフサポート協会	特別養護老人ホーム なごみ	文野 誠司	入居者さんと共に過ごすのご本人の思いの大切さについて(入居から看取りまで)	大阪健康福祉短期大学 介護福祉学科 鴻上 圭太 教授
20	社会福祉法人 堺福祉会	特別養護老人ホーム ハートピア堺	本田 梨恵	パラシュート反射を活用したリスクマネジメント	
21	社会福祉法人 上神谷福祉会	特別養護老人ホーム 槇塚荘	尾崎 陽彦 吉永 寿和子	オリゴ糖による苦痛の少ない排便コントロール	大阪健康福祉短期大学 介護福祉学科 鴻上 圭太 教授
22	社会福祉法人 悠人会	特別養護老人ホーム ベルライブ	堀西 倫正	褥瘡の新規発生、再発防止に対する取り組み	
23	社会福祉法人 晋栄福祉会	ケアホーム ちどり	兼田 みずき 森嶋 淳	～車椅子から椅子への生活へ～	大阪健康福祉短期大学 介護福祉学科 鴻上 圭太 教授
24	社会福祉法人 聖徳園	特別養護老人ホーム ひらかた聖徳園	乾 静香 小篠 加奈	安楽なポジショニングで快適な毎日を!	
25	社会福祉法人 悠人会	ベルファミリアデイサービスセンター	竹田 駿	子ども食堂について社会福祉法人が実践するSDGsの取り組み	大阪城南女子短期大学 現代生活学科 前田 崇博 教授
26	社会福祉法人 もくせい会	ケアハウス きんもくせい	石井 智行 村山 慶	ゴミが散在している環境の中で、不登校になっている父子家庭の子どもたちの支援	
27	社会福祉法人 八尾隣保館	地域支援事業 なないろ	久保田 佳宏	地域支援事業の可能性 ～ソーシャルワークのおもしろさ～	大阪府福祉部地域福祉推進室 地域福祉課 谷岡 伸子 参事

研究大会当日のリアル発表動画をYouTubeでアーカイブ配信中!  
会場で視聴しているかのような臨場感、発表者の緊張感まで余すことなく体感いただけます!  
公開数24動画(※一部発表動画は公開していません)

老人施設部会WEBサイト  
「さくら草ネット」にて情報公開中→



※所属と役職は令和5年2月時点のものです。

## みんなの笑顔がみたいから

CORPORATION 社会福祉法人 聖徳会  
 FACILITY 特別養護老人ホーム大阪老人ホームうえだ  
 POSITION 管理栄養士  
 NAME 森 雅之さん



### 取り組みのきっかけ

#### 食事を通して心を満たす、新しい施設生活を

新型コロナウイルス感染症が発生してからの施設生活を続けるご利用者の変化について、感染症対策で限られた施設生活を営まれるご利用者へのサービス提供を今一度考え直すきっかけとなった。管理栄養士としてご利用者へのアプローチが可能な場面は食事やそれらに関連する行事であると考え、食事を今以上に楽しんでいただき気分転換の一助になれば良いと考えて施設全体で取り組みを実施した。



### 取り組み内容



#### 施設全体の力で実現する

新型コロナウイルス感染症が流行してから自粛していた、食事のレクリエーションや喫茶店、全体行事など食事に関わるイベントを施設一丸となり企画、実施することになった。また、取り組みの実施にあたっては看護師にも協力を仰ぎ、感染症対策を行った。

### 取り組みの結果

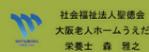
#### 笑顔と安心が広がる、継続的な取り組みで

- ・ご利用者や職員に感染者の発生はなく、安全に実施することができた。
- ・ご利用者も普段とは違った雰囲気や行事を実施することで他のご利用者や職員とのコミュニケーションのきっかけになり、笑顔をたくさん見ることができた。
- ・一度だけでやめるのではなく今後も継続して行事を企画し、ご利用者の笑顔があふれる施設生活が送れるように支援を行ってきたい。



#### 研究大会発表内容

～みんなの笑顔がみたいから～



詳しくは  
こちら



#### Commentator's message

新型コロナウイルスによる制約があるなか、ご利用者の笑顔を見たいという想いから、管理栄養士として何が出来るかを考え、他の職員に提案し巻き込みながらチームで取り組んだ点が素晴らしい。リスクを想定しながら、餅つきや流しソーメンを行ったことも驚いた。今後も一回一回のプログラムを楽しみつつ、食事からもっと何が出来るかご利用者一人ひとりの食事とその方との関係性を見つめながら実践を続けてほしい。

関西大学 人間健康学部人間健康学科 / 種橋 征子 准教授

## 特別養護老人ホームでの軟飯の導入 ～半粥から軟飯への移行～

CORPORATION 社会福祉法人 そうび会  
 FACILITY 特別養護老人ホームつるぎ荘  
 POSITION 管理栄養士  
 NAME 平岡 和美さん



### 取り組みのきっかけ

#### 一人ひとりのご利用者に応じた対応を

米飯では硬く、粥では柔らかすぎる。また、米粒でムせてしまうご利用者に対して、半粥で対応していたが、米飯とお粥を混ぜる割合が職員によって異なる時や、どうしても米飯の米粒が目立って咀嚼や嚥下しにくい方がおられたり、粥の方が目立って、水分でムせてしまう方がおられたりと、統一性がなかったため、軟飯(米飯より柔らかめ)を取り入れた。また二種の形態が混ざった主食(半粥)ではなく、きちんとした柔らかいご飯を食べてもらいたいと思い、取り入れた。



### 取り組み内容

#### 取り組みの3つのポイント

水分量、蒸らし時間、炊き上がりから食べる時間までの米粒の表面や硬さの変化の3つの点に重点をおいて取り組みました。水分量は2倍から始め、2.5倍、2.7倍、3倍と段階を踏み、舌でつぶせる硬さまでに達したのが3倍でした。蒸らし時間は1時間とし、炊き上がりから食べる時間までの間、約2時間で水分量ごとの違いを比べ、一番適していた形が3倍の水分量で出来上がったものでした。



### 取り組みの結果

#### 米飯と同じ味を軟飯でも実現

主食の食事形態の選択肢として、アップ・ダウンの選定がしやすくなった。粥や米飯の時よりもムセなく食べる事ができたため、摂取量がアップした。粥では対応できなかった味ご飯の提供が、軟飯にすることで、米飯と同じように提供できるようになった。



#### 研究大会発表内容

☆取り組み後の食事形態☆  
 ・主食→米飯 軟飯 粥 ミキサー粥

お粥や半粥では、米飯と同じように対応できなかった味ご飯...が!!

→

「ちらし寿司やチャーハン、炊き込みご飯、カレーライスなどの味ご飯も軟飯で対応!!」

詳しくは  
こちら



#### Commentator's message

半粥のデメリットというスキームの課題を、疑問点、気づきとしてあげることができたのは、日頃のモニタリングあるいは他の職種との連携の結果によるものでしょう。特に、展開の中で、STや介護職員、看護師との多職種連携、さらにしっかりと検討期間を設けて取り組んだ点は素晴らしい。今回の事例の真髄は、ご入居者の「みんなと同じ寿司を食べることができて嬉しかった」などの感想に表れている。食事を通してご入居者に楽しみをつくり、生活や人生、命を支えておられる実践でした。

大阪人間科学大学 人間科学部社会福祉学科 / 秦 康宏 准教授

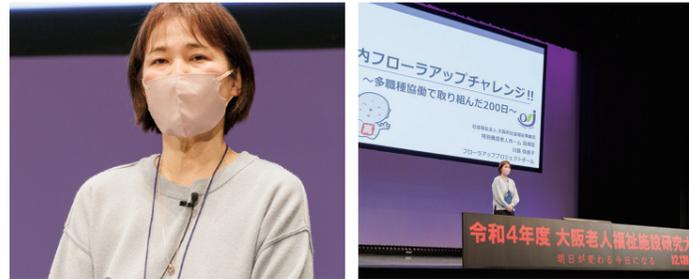


CORPORATION 社会福祉法人 大阪府社会福祉事業団  
 FACILITY 特別養護老人ホーム高槻荘  
 POSITION 主任介護職員 機能訓練指導員  
 NAME 川路 弥恵子さん 山下 正広さん

取り組みのきっかけ

日常のケアからの気づき

“下剤を服用するとご入居者が落ち着かない…なんとかできないかなぁ”。日常的なケア場面の中で感じた疑問や気づき、今までの“当たり前”に対して疑問符を。個別ケアの実現をフローラアップを合言葉に多職種協働で取り組みました。



取り組み内容



多職種で連携した取り組み

介護職員・看護職員をはじめ、管理栄養士や機能訓練指導員、そして医師、それぞれの職種が専門性を活かして、“腸内環境を整え、自然排便に近づける”を目標に、ご入居者8名にアプローチした200日間とこれからをまとめました。

取り組みの結果

様々な場面での効果

下剤の服用回数が大幅に減少したことをはじめ、夜間の睡眠状況の改善、ご入居者の健康に関する興味・主体的な活動参加などQOLの向上、多職種協働意識の向上などという派生効果がみられました。



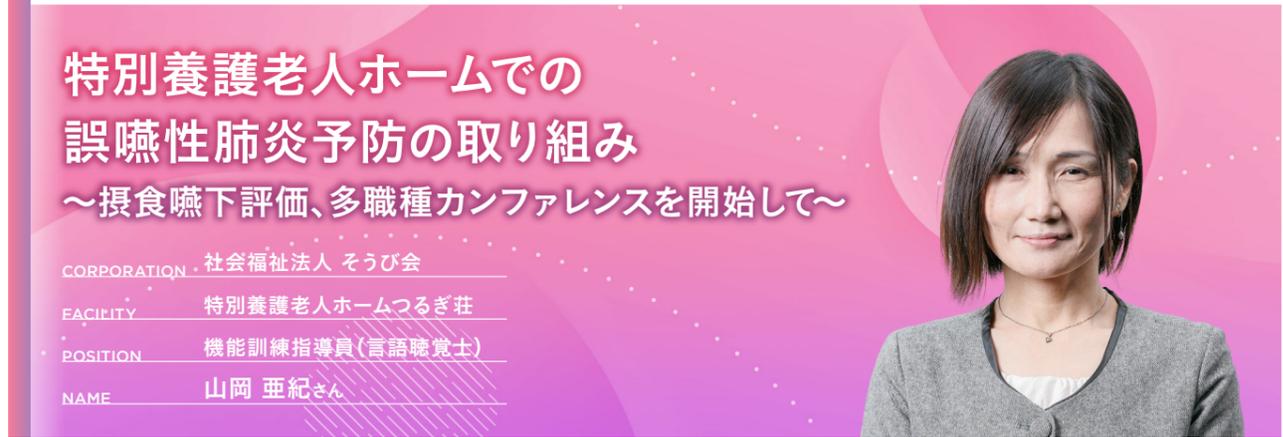
研究大会発表内容

詳しくは  
こちら

Commentator's message

便秘や下痢は、認知症のある方であればよろろ歩きしてしまうような症状が現れたり、不安を高め外にも出られないという気持ちになるため、この排便のコントロールに無理のない形で取り組むことは大切です。今後、施設の中で導入を進めていくということですが、ご利用者の排便に対する心配がなくなった後、そこからまた自分の生活をどう組み立てていくと、どのようなことにチャレンジしてみたいとか、そのような点もお聞きになりながら、今後の生活につなげていただきたいと思います。

関西大学 人間健康学部人間健康学科 / 種橋 征子 准教授



CORPORATION 社会福祉法人 そうび会  
 FACILITY 特別養護老人ホームつるぎ荘  
 POSITION 機能訓練指導員(言語聴覚士)  
 NAME 山岡 亜紀さん

取り組みのきっかけ



チーム力で安心の食事生活を

当施設では、2021年4月に言語聴覚士(以下、ST)、理学療法士(以下、PT)が配属され、専門職による摂食嚥下評価と、それに基づいた多職種カンファレンスの取り組みが開始された。これらの取り組み開始後、誤嚥性肺炎を減少させる結果を得たので報告する。

取り組み内容

専門職の知見を共有し、確かな安心を提供

- ①摂食嚥下評価・多職種カンファレンスにて食形態・とろみの強さなどを決定
- ②とろみの濃度を統一:誰が作っても同じ濃度になるよう、水分量・とろみ剤の量・とろみづけするタイミングを明確にした。
- ③安全に食べるための条件を個別に設定:食事姿勢・環境
- ④嚥下評価依頼伝言板の作成:伝言板をサーバー内に共有し、嚥下評価依頼の入力を受け、STが評価日程を返信。多職種カンファレンスでの決定事項は明文化して申し送りで周知を図った。



取り組みの結果



食の安全を確保し、入院者数半減へ

取り組み後、誤嚥性肺炎による入院者数が半減した(10例→4例)。その要因として、ご入所者の嚥下機能に合った、適切な食形態を提供することに加え、安全に食べるための条件が設定されたこと、カンファレンスの継続により多職種によるチームアプローチが可能となったことが考察された。

研究大会発表内容

結果

- ・誤嚥性肺炎による入院者数 前 118例中10例 → 後 117例中4例
- ・カンファレンスの件数と内容 食形態の変更26件(向上5件、維持6件、低下15件) 姿勢検討3件、提供方法15件の計44件。

詳しくは  
こちら

Commentator's message

多職種連携チームによるアセスメント、アプローチの実践研究の報告ですが、このように目的や目標に向けて、自分一人や一部の職種だけでは達成できないからこそ、チームで連携していくという視点が大事です。また、研究の手法をしっかりと取り入れており、問題点やその背景をしっかりと整理したうえで、研究方法・目的・対象を選定している。さらに、数量化できる客観性を担保する仕掛けを取っており、QOLにおけるQの語源的な意味で言う「本質」に近づけるような発表でした。

大阪人間科学大学 人間科学部社会福祉学科 / 秦 康宏 准教授

## NO 面会, NO LIFE!

CORPORATION 社会福祉法人 ライフサポート協会  
 FACILITY 特別養護老人ホームなごみ  
 POSITION 副施設長  
 NAME 上村 淳さん



## 取り組みのきっかけ

## 当たり前のように貴重な日々を提供

コロナウイルスと共存した暮らしとなり、約3年。介護施設では面会制限が今も尚、継続している施設も多いと思います。当施設は面会制限はしておらず、ご入居者とご家族、知人等が直接会える環境としており、いかに人と人が会う暮らしが大切かを感じてもらえたらと思っています。



## 取り組み内容



## 大切な想いを共有し、安心して面会を続けます

緊急事態宣言やクラスターの発生時以外は、コロナ禍でも面会を制限せずに、いつでもご家族や知人等と会える環境を整えてきました。ご入居者・ご家族の「今」を大切にしていくために、職員で感染予防を実施し、ご家族にも協力を得ながら、一緒になって面会を続けてきました。職員・ご家族の感染に対する理解・人と人が会う環境を大切にしたい想いがあったからこそ面会を実施できているのだと捉えています。

## 取り組みの結果

## 感染予防と生活支援を両立し、人と人が会える環境を共に創り上げる

面会を続けていくうえで、大切なことは「生活の質=安全性の確保」であり、感染を予防しながら、どのようにしたら面会ができるかを考えることです。介護職員の仕事は、生活支援であり「人と人が会う環境を整えること」です。また職員だけでは限界もあるため、ご家族の協力も必要不可欠であり、皆それぞれの生活がある中で、職員もご家族も一緒であるという認識を職員間で持つことが必要だと改めて実感させていただきました。

## 研究大会発表内容

## 我々の仕事は・・・？

介護職員の仕事って介護だけをする訳ではない。  
 我々の仕事は  
 「お年寄りの暮らし(生活)を支えること(生活支援)」  
 生活支援は「人と人が会う環境を整えること」も含まれるのではと思っています。

詳しくは  
こちら

## Commentator's message

面会制限がある中、ご利用者をご家族に会えない、自分の好きなことができないという苦しみ・辛さ、そしてご家族の辛さ、そういう思いを汲み取りながら、生活の質の確保と安全性の確保ということを、良いバランスで支援されてきたと思います。また、人は人と触れ合っていて初めて自分というものが分かり、アイデンティティが確立されていくもの。人と人が会う環境を整えること、人と人が会うことの大切さをしっかり理念として持っておられると感じました。

関西大学 人間健康学部人間健康学科 / 種橋 征子 准教授

認知症高齢者にやさしい  
住まい作り

CORPORATION 社会福祉法人 みささぎ会  
 FACILITY 特別養護老人ホーム大仙もずの音  
 POSITION グループリーダー  
 NAME 藤本 耕介さん



## 取り組みのきっかけ

## 暮らしの質を向上させる居室リフォーム

テーブルとイスだけの殺風景なフロア・すべて同じに見える居室が施設の課題でした。終の棲家と言える老人ホームでご利用者に心地よく生活していただくことを目的として、家庭的なフロアや一人ひとりに合わせた個性的な居室に作り変えることに取り組みました。



## 取り組み内容

## 取り組みの3つのテーマ

テーマに沿って3つの目標を設定しました。

- ① その人らしい暮らしの継続 (環境の整備・掲示用のボードの設置・のれん作り)
- ② 自己選択・自己実現 (衣類管理の改善・余暇スペースの改善)
- ③ 残存機能の活用 (フロアを食事スペースと余暇スペースに分ける)



## 取り組みの結果

## 個性を活かし、自由に過ごせる居心地の良い空間に

- ① 飾っている写真を見て、昔を思い出され話されることが多くなった。個性に合わせた居心地の良い居室環境で暮らせるようになった。
- ② ご利用者自らが着たい洋服を選び、過ごしたい場所・やりたいことを選べるようになった。
- ③ 家事仕事などを行うことで、自然と身体を動かすことができた。居室から出てきてもらうことができた。

## 研究大会発表内容

詳しくは  
こちら

## Commentator's message

全て同じに見える居室というところを、いい意味で否定しているところが素晴らしい。キーワードの「しつらえ」というところに、生活からさらに一歩進んで「暮らし」という表現がピタッと響いてくるように感じた。また、その人らしさ、自己選択、残存機能の活用を中心として取り組まれ、その背景としては、ご利用者ご本人の心身の能力や生活歴、過去にどのように過ごしてきたか、今の身の回りの環境が大きく影響しているということ、今回の発表を通して改めて確認することができました。

大阪人間科学大学 人間科学部社会福祉学科 / 秦 康宏 准教授

# 特別養護老人ホームでの褥瘡予防の 取り組み～体位変換に加え、エアマットレスを システマティックに導入した報告～

CORPORATION 社会福祉法人 そうび会  
FACILITY 特別養護老人ホームつるぎ荘  
POSITION 機能訓練指導員(理学療法士)  
NAME 渡邊 美恵さん



## 取り組みのきっかけ



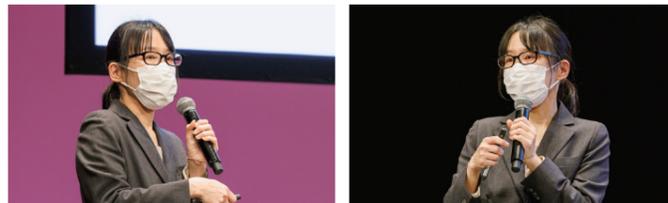
### 褥瘡予防に挑戦

従来から体位変換やポジショニング等、褥瘡予防をしていたが、もっと褥瘡件数を減少させるための方法がないか考えたことが取り組みのきっかけであった。取り組み前は発赤などの初期の褥瘡ができてからエアマットレスを使用していた。予防的に使用するためには、今施設で一番ハイリスクのご入居者を多職種で共有し、エアマットレスを使用することが必要と考えた。

## 取り組み内容

### 褥瘡予防に有効的な エアマットレスを導入

エアマットレスの運用基準を作成し、運用。施設全体で、どのご入居者がハイリスクかを多職種で共有し、他の褥瘡予防方法も合わせてカンファレンスした上で、エアマットレスを設置した。



## 取り組みの結果



### 褥瘡を6割減少させ、エアマットレスで予防成功

月平均の褥瘡発生件数は取り組み前よりも6割に減少した。褥瘡を予防する目的で、あらかじめエアマットレスを導入した14人に褥瘡はできなかった。(褥瘡を予防することができた。)今後、この取り組み内容が全職員に浸透すれば、より褥瘡予防ができる。そのためには勉強会や、常に今の課題とその対策を考え、振り返りをするというPDCAサイクルの継続が必要だと考える。

## 研究大会発表内容

結果 ①取組前後の褥瘡発生件数

月平均 褥瘡発生件数(人)	前	後
d1(発赤)	2.4	1.5
d2(褥瘡)	1.9	1.1
合計	4.3	2.6

※月平均褥瘡発生件数は取り組み前までの項目で減少  
※2月には発赤を含めて0  
※3月・8月はコロナ発生し居室対応入居減少したが、早期に対応した

詳しくは  
コチラ



## Commentator's message

客観的なスケールを用いて、他職種と協働して褥瘡ケアの実践に取り組み、またエアマットレスの運用基準を作りそして見直すといった、素晴らしい実践でした。2040年をターニングポイントとらえた場合、高齢世帯の単身化が進むなか、自宅で最期を迎えるのも難しくなり、施設での看取りが今後ますます増えることが予想されます。終末期の段階でご利用者のQOLをいかに高めていこうかと考えた時に、この褥瘡ケアは非常に重要な問題になってきます。

関西福祉科学大学 社会福祉学部社会福祉学科 / 家高 将明 准教授

# グリーンカーテンでエコ活動 ～みささぎ版SDGsの取り組み～

CORPORATION 社会福祉法人 みささぎ会  
FACILITY グループホームつどうホール  
POSITION グループリーダー  
NAME 宮田 恒志さん



## 取り組みのきっかけ



### SDGsの「気候変動に具体的な対策を」を実践

グループホームでは普段から積極的に園芸活動に取り組んでいる。その中で毎年、藤井寺市主催のグリーンカーテンコンテストにも応募。SDGsの「気候変動に具体的な対策を」を実践し、温暖化防止の一環として、ご利用者・地域の方・職員が協力して取り組む。SDGsが学校教育に導入されつつある中で、最近の学生も関心を持っており、法人としての良いアピールポイントにもなる。

## 取り組み内容

### ご利用者・地域の方と協力してグリーンカーテンを育てた

つるぎ性植物であるゴーヤを中心に、今回はアサガオも同時にご利用者と一緒で育てた。グループホームの窓一面を覆う自然の緑のカーテンとなるように工夫しながら育て、種植えから約2ヶ月、立派なゴーヤを20本ほど収穫できた。また、地域で園芸に詳しい方がおり、以前から緑を上手に育てるコツを教えてもらっていた。それを今回応用してグリーンカーテンを育て上げた。



## 取り組みの結果

### 令和4年度のグリーンカーテンコンテストで 見事「最優秀賞」を受賞

毎日の水やりが良い日課になった。ご利用者と一緒に朝・夕にベランダへ出ることで、良い適度な運動と外気浴の機会となり、1日の生活リズムが安定する要因となった。また、ゴーヤと一緒に育て、収穫し、食べる楽しみができた。ご利用者と一連の作業を一緒に行うことで、日常生活の中で良い役割も担ってもらえた。他にもエアコンの設定温度を上げることもでき、省エネを実現できた。



## 研究大会発表内容



詳しくは  
コチラ



## Commentator's message

施設あるいは職員としてのミッションや、ポリシーをすごく大切にしている、つまり役割をしっかりとご理解したうえで活動だと感じました。また、この取り組みを通して、施設や地域の人の心を育む、あるいは人の心を「ほぐく」ことにもつながっています。楽しみとやりがいを持ちながら、個人として、また組織としてもやっていく、あるいは地域の方と確認し合いながら実施していくということは、みんなが同じ方向に向かう、ある意味SDGsと同じ考え方にもなると思います。

四天王寺大学 教育学部教育学科 / 吉田 祐一郎 准教授

## 空調メーカーと協同し空調省エネ運用の自動化で電気代削減と、省エネ大賞受賞後のチーム力UP

CORPORATION 社会福祉法人 蒼生福祉会  
 FACILITY 特別養護老人ホーム南郷の里  
 POSITION 理事長兼施設長 ダイキン工業株式会社  
 NAME 宮中 久美さん 和田 萌さん



### 取り組みのきっかけ

#### 省エネで快適な空調を実現!

施設のエアコン修理に来ていたサービスマンに、年々施設運営の大きな負担になっている電気代の削減方法を相談したことがきっかけでした。「ご利用者の健康と職員の働きやすさ」の観点で最も大事であるため、それを損なうことなく電気代削減できる手段を探していたところ、「空調の省エネ運転を自動化」するダイキンさんのエネルギーマネジメントサービスであれば、快適性を維持しながら手間もかからず省エネできるとご提案いただきました。サービスの品質維持と電気代削減の両方が実現できる点や、従来からお付き合いのあるダイキンさんからの提案であれば試してみよう、という想いから導入に至りました。



### 取り組み内容



#### 省エネ運用と自由な発想で、快適な職場を

まずは高機能コントローラを導入して運転スケジュールを登録し、空調運用を自動化しました。また、省エネと快適性の両立ポイントを探すために空調運転データを取り、使用状況を「見える化」しました。データを活用したダイキンさんからの運用改善策と、ご利用者や職員の声を反映しながら最適な省エネ運用を決めています。施設独自のアロハシャツを着て涼しく働く「ハワイアンフェア」は、元々売上が低下した際に「アロハシャツを着て明るく営業してみたら」という発想から「自腹ですが着たい人はどうぞ」と始めた工夫です。それが自由を大切にする法人風土に合い、今では地域にも認知される南郷の代名詞となり、南郷ブランドを確立しています。

### 取り組みの結果

#### 自主性とチャレンジが創る、成長と誇りの組織

電気代約117万円削減、エネ材料を除くと約90万円のメリットを創出しました。平成28年には取組内容や成果が評価され、省エネ大賞を受賞。ダイキンさんでは、このエネナサーサービスを「EneFocusα(エネフォーカスアルファ)」として商品化もされました。受賞後は職員にコスト意識が定着し、自分たちのサービスに誇りを持って営業や発信に一層力が入り、収益を伸ばしています。成功体験の積み重ねや頑張りが還元される仕組みの構築により職員の自主性が高まり、失敗を恐れずチャレンジする組織風土や『南郷らしさ』が確立されました。個々からユニットやチームに広がる「自信」がチーム力UPの秘訣となり、今も成長し続けています。

**研究大会発表内容**

成長体験を振り返る

「働きやすさ」が「働き甲斐」につながる

96% 0.5H 1.4%

8.4年 83%

成功体験の積み重ねが失敗を恐れずチャレンジする組織風土を確立し、「南郷らしさ」が確立。個々の自信はユニット・チームの自信へと繋がれ、チーム力UP。

詳しくは  
こちら

**Commentator's message**

今回の実践は、「スマートの法則」に照らし合わせても、タイトルにある「チーム力アップ」につながったと言えます。省エネを行うことによってチーム力が向上し、結果的に働きやすい職場に変わり、働きやすい職場になることでより質の高い実践ができると考えていくと、この省エネの問題は、自分たちの福祉の専門性や価値と関連性があり、このような取り組みの角度からも、支援の質の向上につながることで、新たな気づきを与えてくれました。

関西福祉科学大学 社会福祉学部社会福祉学科 / 家高 将明 准教授

## 「中高生、地域のハブへの挑戦」

CORPORATION 社会福祉法人 秀幸福祉会  
 FACILITY 特別養護老人ホーム庄栄エルダーセンター  
 POSITION 追手門学院中・高等学校ユネスコ国際研究部  
 NAME 音羽さん、植場さん、宮内さん、前田さん、池上さん、堀之内さん



### 取り組みのきっかけ



#### 地域と連携して防災に取り組む、新たな挑戦

茨木市街づくり協議会にて庄栄エルダーセンター神野様にお会いし、本校ユネスコ国際研究部の取り組みに関心をお持ちいただいた。その後、地域の活性化を図る方法について議論を重ね、その中で官・民・学協働の防災訓練に参加させていただくことになった。

### 取り組み内容

#### ユネスコ国際研究部が防災ワークショップを実施

ユネスコ国際研究部が、園児・高齢者の方を対象とした防災ワークショップを実施した。主な内容は2点で、1点目は新聞紙で作るスリッパを紹介した。本来であれば一緒に作成したいところではあったが、持ち時間の関係で部員同士が目の前でタイムレースで作成する形をとった。その後、そのスリッパを履いて、がれきに見立てたレゴブロックの上を歩いて見せた。2点目は蓄光テープの紹介をし、それを使ってリストバンドを一緒に作成した。



### 取り組みの結果

#### 参加者目線でのプログラム作成と臨機応変な対応でチーム力UP

これまでに小学生を対象としたワークショップは経験があるが、園児や高齢者を対象としたものは初めてで、事前準備の際から「伝わりやすい表現」や、「取り組みやすい活動」という、より参加者目線でのプログラム作成ができた。それでも、いざ当日になってみるとこちらが想定していたようには進まず、柔軟な対応力を要した。一方で、チームとして臨機応変に対応することができ、チームとしてのつながりと自信を深めることができた。また、中高生である自分たちにも、社会・地域に対してできることはたくさんあるということを実感できた。

**研究大会発表内容**

地域コミュニティ

詳しくは  
こちら

**Commentator's message**

ご発表の中であった「町を守っていかねばいけない」という言葉を聞かせていただいて本当に嬉しかった。東日本大震災の避難所の運営には、実は多くの中高生がメンバーとして関わっていたり、「釜石の奇跡」と呼ばれる出来事では、中高生による誘導が地域の子どもの命を守ることにつながりました。防災をテーマに、年代を問わず大人と子どもが対等な立場で、これからの地域社会をどのように作っていくかを一緒に考えることが大切です。

四天王寺大学 教育学部教育学科 / 吉田 祐一郎 准教授

## 古き良き時代を思い出して ～UR団地住民の心と体の活性化を目指して～

CORPORATION 社会福祉法人 秀幸福祉会  
FACILITY いぎいきネット相談支援センターエルダー  
POSITION コミュニティソーシャルワーカー  
NAME 神野 享士さん



### 取り組みのきっかけ

#### 地域のつながりを取り戻し、孤立化・孤独化を解消するために

現在、CSW(コミュニティソーシャルワーカー)として担当しているUR総持寺団地。高齢化率53%、世帯構成1.4人にあるこの団地の自治会が3年前に解散した。これまで毎年開催されていた夏祭りなどのイベントが全てなくなり、住民同士の関わり合いがこれまで以上に希薄になった。住民、特に高齢者の孤立化、孤独化が最大の問題であり、今後起こり得る様々な課題に対して、住民と関係機関が問題意識を共有して理解し合い、協同で取り組むことが大事であると考えたため。

### 取り組み内容

#### 住民との共創で団地の活性化を目指す！

毎月定例で1時間程度のミーティングを、団地住民、地域の福祉の担い手、関係機関等で「総持寺団地支え合いミーティング」と称して開催。団地の活性化についてアイデアを出し合い、出たアイデアを実践するための協議を重ねる。その中から次の取り組みを行う。

- ①住民の声を聴く場「よりそい相談会」の定期開催。
- ②団地の話題に特化した情報紙「よりそいニューズレター」の発刊、全戸配布。
- ③賑わっていた時代の写真を集めた「昔懐かしの写真展」の開催。
- ④団地住民の集いの場「カフェよりそい」の定期開催。

今後も様々な取り組みを継続して行う予定。



### 取り組みの結果

#### 住民主体の協働で、団地を活性化！

「古き良き時代を住民の皆様思い出していただくことで、我が事として団地の活性化を考える～顔見知りになれば、自然とお互いを気遣い、人と人がつながる～」を念頭に専門職が出しゃばりすぎることなく、住民や地域の福祉の担い手に想いやアイデア(提案)を語っていただき、とにかく協働して実践する。そしてその振り返りをして次の仕掛けを皆で考えることで、やらされてる感を生み出さず、自発的に継続性をもって取り組んでいる。URもこの取り組みに参画してもらえるようになり、一部資金面での協力を得られ、さらに活動が円滑かつ活発にできるようになった。

#### 研究大会発表内容



#### 詳しくは コチラ



#### Commentator's message

特に印象的だったのは、専門機関がでしゃばりすぎないということと、住民にやらされ感を与えないで我が事として捉えてもらい、住民主体の活動を実現していくというところで、まさにコミュニティワークの実践だと感じました。普段からコミュニティソーシャルワーカーとしての業務に加え、コミュニティワークもされており、地域福祉においてはこの両輪がすごく大事だと言われているので、この2つをしっかりと組み合わせて展開しているご報告でした。

関西福祉科学大学 社会福祉学部社会福祉学科 / 家高 将明 准教授

## 福祉のチカラで街を元気に！ 過疎地域「豊能町」で良質な 地域コミュニティを作りたい

CORPORATION 社会福祉法人 豊悠福祉会  
FACILITY 祥雲館  
POSITION 介護職員 介護職員 介護職員  
NAME 山根 奈々さん 落谷 菜摘さん 鈴木 るうなさん



### 取り組みのきっかけ



#### 地域課題に共に取り組み、笑顔でつながる『笑雲café』

福祉施設(職員)と地域住民との学び合いの場として、2010年4月から「笑雲café」活動が始まり、過疎地域「豊能町」の持つ地域課題や住民の想いを共有することによって、社会福祉法人だからこそできる取り組みを地域住民と一緒に模索しながら歩んできました。

### 取り組み内容

#### SDGsに目を向けた取り組み

私たちは、住民が集うイベントを企画運営しています。今年度より、新たにSDGsに目を向けた活動として、「祥雲館SDGsプロジェクト」を立ち上げ、いつまでも安心して住み続けられる地域となるために、自分たちができることを考え実践しています。具体的には、2か月に1回の地元里山の清掃活動の実施、地域交流スペースでの健康体操やよろず相談会、まちの保健室などの定期的開催などを行っています。コロナ禍で、外出する機会が少なくなり、住民同士の交流が薄れてしまった今だからこそ、定期的に人と人が集い、近況や困りごとなどを共有できる場を作っています。



### 取り組みの結果

#### 地域再生の輝き、人と人をつなぐファッションショー

ウイズコロナの中で、これまでの地域活性化活動を復活すべく、地域活動を再開してまいりました。地域交流スペースでの定期開催のイベントも、地域住民の憩いの場として認知され、徐々に定着してきました。そして、2023年1月に、町内の大きなホールで、地域住民参加型、町で輝いている人にスポットあてたファッションショー「祥雲館TOYONO COLLECTION2022」を開催することができました。モデル19名、来場者200名、そして地域企業にも運営協力をしていただき、地域を巻き込んだ盛大なイベントとなりました。その様子をダイジェストとしてYouTube「人生の学校」で配信しています。ぜひ、ご視聴ください。これからも、多世代が集い、学び合うイベントを企画していきたいです。

#### 研究大会発表内容



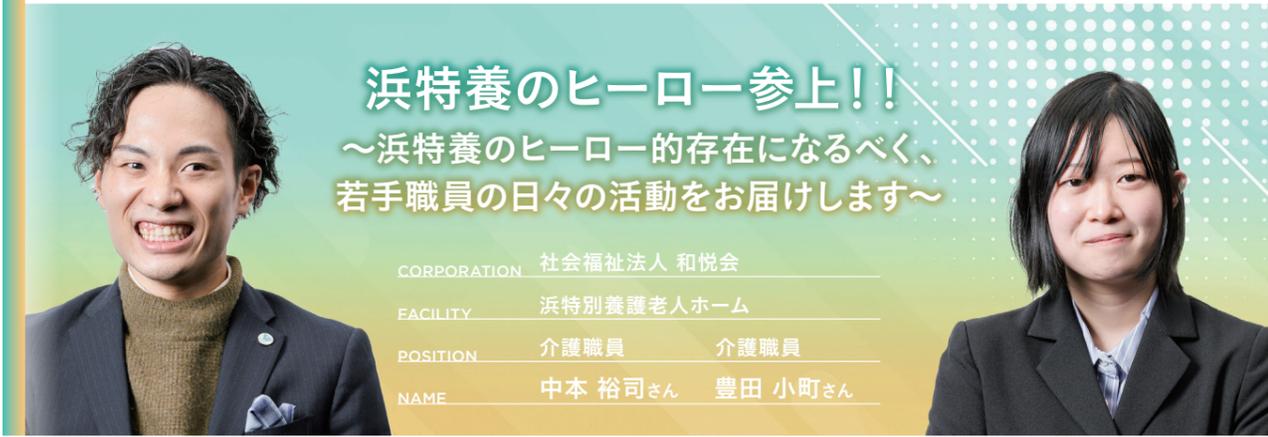
#### 詳しくは コチラ



#### Commentator's message

発表を通して、街の活性化もさることながら、人が動くことによって、人がそれぞれに関心を持って、その接点をすごく広げているように感じました。また、キーワードに「笑い」を取り上げ、笑顔があふれる街になることで施設も元気になる。福祉系ソーシャルベンチャーという実践は、福祉から社会も地域も変えられる。私たちの視点だからこそ、より住民に寄り添ったものを住民と一緒に作っていく、そのような取り組みにつながると思います。

四天王寺大学 教育学部教育学科 / 吉田 祐一郎 准教授



## 浜特養のヒーロー参上!!

～浜特養のヒーロー的存在になるべく、  
若手職員の日々の活動をお届けします～

CORPORATION 社会福祉法人 和悦会  
 FACILITY 浜特別養護老人ホーム  
 POSITION 介護職員 介護職員  
 NAME 中本 裕司さん 豊田 小町さん

### 取り組みのきっかけ

## 新人職員の声が聞ける! 入職前後の感想発表会

前年同様に、当施設で入職1～2年目の職員に対し、入職前後で自分たちの介護業界で感じていることについて発表する機会をいただきました。1～2年目で大きな研究や豊富な知識を発表する訳ではないのですが、等身大で感じていることや仕事のやりがい・楽しさ・難しさを伝えることにより、同じような経験が浅い職員や、未経験からの入転職を考えておられる方にも、具体的なイメージを持っていただき、参考の一つにしてもらえたら嬉しく思います。入職時、どうしても不安はつきものです。どうしたら楽しく仕事ができるのか? 自信が持てるのか? そのような思いを私たちも最近まで感じていました。見ていただいて皆さんの不安が少しでも解消できれば幸いです。



### 取り組み内容



## リアルな声で福祉の魅力を伝えます!

介護や福祉に興味がある方、入職を考えている方に向けて、入職2年目の2人が発表します。実際に働いてみて介護はどういう仕事なのか、福祉業界を選んだきっかけなどをまとめてみました。仕事をする上で苦労したことや悩んだことなど失敗談も一緒に振り返りながら、魅力に思うこと、めざしていきたいことをお伝えできればと思っています。経験の浅い2人が思う大切に感じることを、福祉業界に興味がある方だけでなく、少しでも多くの方に介護福祉で働く人のリアルな声としてお伝えしたいと思って取り組みました。

### 取り組みの結果

## 2年目の経験を活かし、日々成長をめざす

私たちの2年間の経験を伝えられたこと、そして入職当初の初心を再び感じられたことに対して、とても充実した時間を過ごすことができました。今後、自分たちに必要なことをもっと学んで行き、それを後輩たちに指導できるように日々取り組んでいく予定です。まずは、ご入居者、ご利用者について知っていくこと、認知症の症例や特徴などを勉強していくことを目標として日々取り組んでいこうと考えております。そして、ご入居者、ご利用者、スタッフ、ご家族にも安心、信頼される職員になるため、3年目もっと楽しく一生懸命に頑張ります。

### 研究大会発表内容



詳しくは  
こちら



### Commentator's message

発表を聞いて、「ブランディング」という言葉が最近よく使われているが、我々が当たり前に行っている介護をブランド化し、しっかりと外部に伝えるということが、我々には足りなかったのではないかと反省に立ち返った。世の中にある職業は、ICT化やAI化によってかなりのものが失われると言われているが、介護の仕事はそう簡単にはAIや機械に乗り換えられない業務ベストIOに必ず入っているということを、我々も含めて外部にアピールしていくことが求められる。

近畿社会福祉専門学校 / 樹 豪司 校長



## 認知症のご利用者に対する 学習療法の効果について

～前頭前野への刺激で認知機能を改善しよう～

CORPORATION 社会福祉法人 成光苑  
 FACILITY デイサービスセンターせつ桜苑  
 POSITION 生活相談員  
 NAME 櫻田 愛さん

### 取り組みのきっかけ

## 認知症ケアの未来を拓く学習療法の研究

日常生活動作の低下や認知症によって支援を必要とするご利用者が年々増加しており、認知症の方と介護者が精神的に安定して関わられるように、認知症に効果のある学習療法に着目し、認知症状に改善がみられるか研究を行った。



### 取り組み内容

## 6つの取り組み内容

- ・昼食後に学習療法(読み書きや簡単な計算をし、その後国語・社会・英語など)のプリントを配布し、始りの挨拶から終わりまで30分間で行う。
- ・最初に必ず先生(進行)が挨拶し学習療法の説明を行う。
- ・プリントを配布し、まず5分間計算問題を行い、答え合わせを全員で行う。
- ・計算後に科目別のプリントをしていただき、10分後に全員で答え合わせを行う。
- ・その際「前回よりも早く解きましたね」等、褒めることを心掛ける。
- ・実施した認知症のあるご利用者に、実施前後に長谷川式簡易知能評価スケールを行い、点数が向上するか検証する。

### 取り組みの結果

## 認知症支援に学習療法の可能性を

令和4年6月1日～8月31日に行った対象者1名の長谷川式簡易知能評価スケールの点数が18点から22点に向上していた。また、前頭前野にかかわる能力が回復し、話す言葉も明瞭になった。継続的に褒められることで自身の存在を認められていることが認識でき、精神状態の安定が図れたように思われる。また、職員とのコミュニケーションを取る機会も増え、良い関係づくりのツールにもなったと考えられる。



### 研究大会発表内容



詳しくは  
こちら



### Commentator's message

日々の実践と関わりの中で、認知症の方へのケアを思い描きながら、より良いケアを提供したいという想いが伝わってくる発表内容でした。数字的に客観的に表していきたいという想いが見て取れたところや、ご利用者ご本人の生活の質であるとか、職員のスキルアップというような場面にも触れているところが素晴らしい。今後、認知機能やコミュニケーション機能、身辺自立などについても、目標・目的にしながら、その検証も行っていただきたい。

大阪人間科学大学 人間科学部社会福祉学科 / 武田 卓也 教授

## 看取りから学んだ、人生の幕引きのお手伝い

CORPORATION 社会福祉法人 ライフサポート協会  
 FACILITY 特別養護老人ホームなごみ  
 POSITION ユニットリーダー  
 NAME 兼田 浩也さん



### 取り組みのきっかけ

#### 看取り経験から見た、生と死の大切さ

数少ない看取り経験の中で、「お年寄りって様々な亡くなり方をされるんだなあ」と感じたことや、亡くなる直前の終末期に入ってから、あれこれ考えてみても仕方がないと感じました。そのような中で、今、自分自身ができることは何か？を考え、自分が大切にしていることや、大事にしている想いをお伝えしたい、という気持ちになったのがきっかけです。



### 取り組み内容



#### 今、できることを大切に

取り組み内容として、「今」をキーワードに、自分に何ができるか？を考えた結果、痛みに苦しむお年寄りの「痛みの緩和ケア」や、「食の楽しみ」といったことでは、本人さんが好む嗜好品の提供を迅速に行っていますが、特に大切にしていることは、お年寄りや普段からの関わりの中で何ができているか、を常に念頭に置いて行動することでした。

### 取り組みの結果

#### 最期まで大切に、笑顔で見送りたい

今現在、まだ看取りケアを引き続き行っている段階で、具体的な結果や成果などは出ていませんが、看取らせて貰っているお年寄りが最期を迎えた時に、自分は涙してしまうでしょうが、後悔する事無く「お疲れ様。あちらの世界でも達者で暮らしてね!」と笑顔で挨拶を交わして送り出せると考えています。



#### 研究大会発表内容



ご清聴、ありがとうございました。

#### 詳しくは コチラ



#### Commentator's message

発表を聞いて、ラテン語で「メントモリ」という「死を思え」とか「すべては有限である」という意味の言葉を思い出しました。人は約束された死があるからこそ、今をどのように生きるかということがとても大事であり、それを自己選択・自己決定・自己責任で高齢者がご自分一人で行うことができないから、ケアワーカーがある程度、ご利用者のことを考えてケアにしっかりと反映するということが、特にターミナルケアにおいては大切なことだと思いました。

近畿社会福祉専門学校 / 榎 豪司 校長

## ヴェルディ八戸ノ里でのICTの導入により得られた結果とその考察

CORPORATION 社会福祉法人 天心会  
 FACILITY 特別養護老人ホームヴェルディ八戸ノ里  
 POSITION ユニットリーダー ケアワーカー ケアワーカー  
 NAME 鈴木 嘉剛さん 大上 幸子さん 吉田 奈緒子さん



### 取り組みのきっかけ



#### ICT導入で介護サービスをより質の高いものに

昨今、特養へのご入居者の要介護度は年々上昇しており、直接ケアの業務だけでなく間接的な業務といった目に見えにくい役割も求められることが多くなりました。介護業界でもDX(デジタルトランスフォーメーション)が推進され、国のICTの活用支援もさらに強化されています。当施設も時代の変革に追随すべくICTを利用した業務の効率化がサービスの質を上げることに活かせないかと導入を開始しました。福祉現場のICT化が業務の効率化・生産性の向上、そしてご利用者のケアの質の向上にどのような影響があるのかを考察し、さらに改善できないかと考え調査しました。

### 取り組み内容

#### 介護現場の効率化とケアの質を向上

ICT促進委員会を立ち上げ、2022年春から全館にWi-Fiの整備、iPad(ケア記録入力用のタブレット端末)、iPhone(インカム用)を導入しました。iPadやiPhoneは付属機能や拡張性も高いことからインカムにはアプリ式を選びました。今回の実践発表では、主にICT機器を活用しているケアスタッフ、看護スタッフへ「業務効率」「職員の負担軽減及び生産性の向上」「ご利用者のケアの反映」などをアンケート調査しました。そのデータからICT機器の導入により、具体的にどのような効果が得られたのかを世代別に集計して分析しました。



### 取り組みの結果

#### ICT機器導入により、業務効率化とケアの質の向上を実感

アンケート結果より、50%以上の職員が「業務が効率化した」「負担が軽減した」と回答、60%以上の職員が「移動時間が削減された」「丁寧な身体介護にあてられた」「会話時間が増加した」と回答し、ケアの質の向上にも効果が見られました。また、若い世代の職員を中心に音声入力機能などを積極的に使用したことで「事務処理時間の軽減」「伝達・移動時間の削減」ができた具体的な意見も得られました。他にも実際の使用による効果だけでなく、新たに入職するスタッフからは先進性や職員目線に立った職場環境づくりに共鳴する声も聞くことができました。これからの課題としては、ICT機器に不慣れなことから活用する機能が限定的という意見も根強く、浸透させるにはさらなる工夫も必要と確認できました。今後、眠りスキャン(パラマウントベッド)の導入も進めていますが、ICT機器の活用効果を引き続き検証し、職場環境の変化が、働くモチベーションになることを期待して取り組んでまいります。

#### 研究大会発表内容



- インカム
  - ・ユニット職員・看護師が1人に1台iPhoneを携帯
  - ・Wi-Fi環境の整備
  - ・トランシーバー型ではなく、アプリ式のインカムを使用  
拡張性が高い
  - ・イヤホン、ポタンタイプ  
ネックスピーカータイプ
  - ・グループ設定による  
通話グループの切り替え



#### 詳しくは コチラ



#### Commentator's message

このICTというところでは、今後若手職員の新しい活躍の場が進んでいくことを考えると、今回の取り組みはかなり先を見て、そして今後の介護のあり方というものを見ていく上で素晴らしい土台になるような気がしました。また、3つの目的というあたりが、量的調査、質的調査の側面から考えることによって、若手職員にいい効果、そして次に活かせる、現場で活躍できるような新しい知見にもつながるように感じました。

大阪人間科学大学 人間科学部社会福祉学科 / 武田 卓也 教授

## ユニット活動目標の実現に向けて

CORPORATION 社会福祉法人 悠人会  
 FACILITY 特別養護老人ホームベルアルプ  
 POSITION 介護職リーダー  
 NAME 鈴木 隆宏さん



### 取り組みのきっかけ

## メンバーとの関わりを見直し、チームカアップをめざす！

リーダーとしての果たすべき役割として、メンバーの経験年数や個々のスキル・成長段階に合わせた関わりが不十分であると認識している。特にメンバーの能力に応じた役割設定が明確ではなかったこともあり、メンバーの力が十分に発揮されていない現状があった。今年度はユニット活動目標実現に向け、メンバーシップを高めるためにリーダーとしての自身の関わり方を見直したいと考え取り組んだ。

### 取り組み内容

## チームを成功に導く5つのアプローチ

チームを運営するにあたり5つのアプローチを立案した。

- ①ユニット活動目標を作成する際にメンバーの想いやチームの課題を踏まえ、目標を設定。
- ②リーダー（私）とユニットリーダーで活動計画の草案を作成し、メンバーの合意形成を得る。
- ③能力・経験年数に応じてコーチング・ティーチングを意識した関わりを実践。
- ④チーム運営として進捗状況の確認。
- ⑤モチベーション維持やストレス管理のため、定期的な面談を実施。

以上の方策をユニット活動実現に向けてメンバーへのアプローチとして実践した。



### 取り組みの結果

## チームの成功は、目標設定とメンバー育成にあり

ユニット活動目標達成に向けてチームで取り組んだ結果、取り組み内容も定着しご利用者・ご家族、メンバーや上司からの感謝・労いの言葉によりメンバーの達成感・充実感を得ることができた。またモチベーションアップ・やりがいを感じることができ、メンバー自身の内的動機づけにもつながったといえる。積極性や主体性も生まれ、チーム全体が活性化し、好循環が生まれているのを体感できた。今回の取り組み結果が、目標設定・メンバーの育成・業務管理・環境の改善へのヒントとして私自身の成功体験となったことは自信にもつながったと言える。今後もリーダーシップを発揮し、チームマネジメント能力向上へ取り組んでいきたい。

### 研究大会発表内容



### 詳しくは コチラ



### Commentator's message

介護はサービス業だと思いますか。皆さんどうでしょう。もしサービス業ならば、「メニュー表」が充実していなければ、サービス業に少し足りない部分があるのではないのでしょうか。ユニットケアも、手を握るだけというのもすごいサービスかもしれませんし、寝たきりの高齢者に対するものなど、非常に深いテーマを包括しています。ユニットケアという触媒から色んな考察をしている点も非常に深いテーマですので、今後も研究を積み上げてテーマを掘り下げていただきたい。

近畿社会福祉専門学校 / 樹 豪司 校長

## 集まれ！喫茶 なごみへ ～みんなの憩いの場～

CORPORATION 社会福祉法人 あゆみ会  
 FACILITY 特別養護老人ホームアンパス東大阪  
 POSITION 管理栄養士 介護職(サブリーダー)  
 NAME 西川 真依さん 北川 かおるさん



### 取り組みのきっかけ



## 制限の中でも楽しみを創造する

コロナ禍の影響で施設では行事や外出等ができていませんでした。そのため、ご利用者の生活は毎日単調で楽しみが少なく、さらに制限ばかりでリラックスできる場もありませんでした。そこで、管理栄養士、介護福祉士として、ご利用者に喜んでいただけることを模索していました。

### 取り組み内容

## ICTとアイデアでリラックス空間を提供！ 喫茶なごみ

まず、ご利用者のニーズを知るためにICTを活用し業務を効率化することでその余剰時間でご利用者と関わる時間を増やしました。さらに、ご利用者と職員が気軽に話せる場を作ろうと考えました。そこで始めたのが『喫茶なごみ』です。ご利用者から喫茶店に出かけたい等のニーズがあったので、コーヒーを飲みながら、ご利用者と職員が気軽に話せる場所を作りました。外部のボランティアを呼ぶこともできないので、他部署にも協力依頼し、喫茶を週2回定期開催して喫茶をより身近な存在にすることをめざしました。



### 取り組みの結果

## 小さな楽しみが大きな幸せに

喫茶を開催して、ご利用者の日常生活の中に週2回さやかな楽しみができ、喫茶の日はウキウキした様子が見られ、生活にメリハリができました。また、ご利用者同士の会話も増え、交流ができました。職員にとっても喫茶での会話の中でご利用者の新しい一面を知るきっかけとなりました。その結果、『喫茶なごみ』は今ではアンパス東大阪ではなくはならない皆の憩いの場となりました。そして、喫茶での会話の中で知り得たご利用者のニーズに応じて、「バーチャル初詣」を喫茶なごみとコラボして実現させました。

### 研究大会発表内容



### 詳しくは コチラ



### Commentator's message

管理栄養士や介護職の皆さんが連携をしながら、ご利用者のニーズに寄り添って、その人が自分らしい生活を送り、さらに生活が継続できるもの実践だと感じました。また、コロナ禍の中で、ご利用者の生活をどのように豊かにするかを、悩みながらしっかりと考えたのではないのでしょうか。今回のICTを活用した取り組みは、そこからまた広がり生まれ、施設自体のケアの質というものも、今までよりさらに一歩進んだものにつながられたと思いました。

大阪人間科学大学 人間科学部社会福祉学科 / 武田 卓也 教授

## 入居者さんと共に過ごしての ご本人の思いの大切さについて (入居から看取りまで)

CORPORATION 社会福祉法人 ライフサポート協会  
FACILITY 特別養護老人ホームなごみ  
POSITION ユニット職員  
NAME 文野 誠司さん



### 取り組みのきっかけ

#### 共に生活することで生まれる絆

入居者さんと共に過ごし、ご入居から看取りまでの一人の入居者さんにスポットを当てたことが、ご本人の思いの大切さについて理解するきっかけとなりました。実際一緒に生活する中で、入居者さんとの関係が構築でき、近親のような関係となりました。入居者さんと喜怒哀楽を共に生活したことは、私にとって大きな出来事でした。



### 取り組み内容



#### 「ぬか漬け」から始まった、心の絆

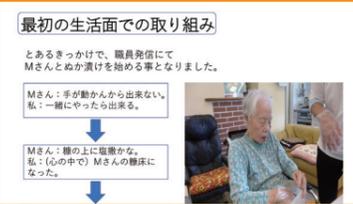
入居者さんと初めての大きな取り組み内容は、職員から発信を行いご本人の同意を得た上で、一緒に「ぬか漬け」を行ったことでした。そして居室の環境整備なども行いました。月日の経過と共に私と入居者さんとの間で人間関係が構築され、ご本人の本心を知ることができました。その際の取り組みはご本人の生活の中に存在し、「トイレに行きたい」との思いにより終身まで取り組むこととなりました。

### 取り組みの結果

#### 「本人本意の支援」を実現するためには、まずは人間関係の構築が大切

人間関係があまり構築できていない頃の取り組みは、職員からの発信にてご本人の同意を得たもので、1か月もしくは、半年程で終了となりました。現場職員の連携不足や、実際取り組みをしたがご本人が望まない結果となったため終了となってしまいました。しかし、ご本人との関係性が構築されるとご本人の本音の部分を知ることができ、実際の生活場面での要望ではありましたが、ご本人の訴えから職員が共感し取り組みを行ったことで、終身まで取り組みを継続することとなりました。「本人本意の支援」について、ご本人との関係性を構築し、ご本人を知ることがとても重要だと実感しました。

### 研究大会発表内容



### 詳しくは コチラ



### Commentator's message

今までの介護や福祉は、ご利用者を保護することが中心でしたが、ご利用者ができることは一体何なのかを見つけ出していくことが、これからの福祉の新たな展開の道だと思えます。自立するとかできるという部分だけに着目してしまえば、何かマイナスの要素に行きませんが、「共感」という言葉を出していたように、共感しながらご利用者の生活を一緒に作るということが、今後の介護のキーワードになっていくのではないかと感じました。

大阪健康福祉短期大学 介護福祉学科 / 鴻上 圭太 教授

## パラシュート反射を活用した リスクマネジメント

CORPORATION 社会福祉法人 堺福祉会  
FACILITY 特別養護老人ホームハートピア堺  
POSITION 介護福祉士  
NAME 本田 梨恵さん



### 取り組みのきっかけ



#### 自立支援につながるケア

人は咄嗟に手が出る(パラシュート反射)ことで、転倒を防ぐことができますが、加齢とともにその機能が低下します。そのため、日常生活の中でパラシュート反射を維持向上する動きを取り入れ、重大事故を減らす取り組みを行っています。この取り組みは、ご利用者の活動量を増やし、自立支援につながるケアとして重要です。

### 取り組み内容

#### 「パラシュート反射」で安心、健やかな生活を

ご利用者には手を動かしていただく機会を多く作りました。コミュニケーションの中で、握手やハイタッチ、手を挙げて挨拶等の機会を多く持ちました。体操ではしっかり手を動かしてもらうように声掛けをしました。活動の中では、手を使うゲームや遊びが有効だと考えました。手遊びの機会やパンチングマシンを用意し、ご利用者と一緒にスタッフも楽しみました。「幸せなら手をたたこう」を流して、リズムよく手をたたいてもらいました。



### 取り組みの結果



#### 自発的な手の動きがリスクマネジメントに

自発的に、自然に手を動かしてもらう機会が多ければ多いほど、結果として、リスクマネジメントにつながる事がわかってきました。

### 研究大会発表内容



### Commentator's message

リスクマネジメントを考えるうえで、ご利用者が転倒しにくいよう環境を整えるところに割と進みがちですが、そうではなくて、ご利用者の持っている防御反応をさらに高めようという視点は素晴らしいと感じました。また、発表の中であった色々なゲームをしたり、お好み焼きを食べたりなど、そういったことがリハビリになっているという意識をきちんと持って進めることが大事であり、生活の中でやっていくことは持続性があるため、生活リハビリは大切だと思います。

大阪保健福祉専門学校 / 藤原 孝之 教務部長



## オリゴ糖による苦痛の少ない排便コントロール

CORPORATION 社会福祉法人 上神谷福祉会  
 FACILITY 特別養護老人ホーム 横塚荘  
 POSITION 管理栄養士 看護主任  
 NAME 尾崎 陽彦さん 吉永 寿和子さん

### 取り組みのきっかけ

#### 便秘解消の新しい選択肢:オリゴ糖の可能性

頓服の大腸刺激性下剤を使用し、排便コントロールを行っていたが、水様便が多量に幾度と続き、ご本人の苦痛は勿論、介護負担の大きな原因のひとつとなっていた。そこでオリゴ糖を試してみた。



### 取り組み内容



#### 自然な排便をめざす、オリゴ糖の力

目標を設定。①下剤を減らそう。②自然排便に近づけよう。取り組みとして、頓服の大腸刺激性下剤を中止。今まで排便マイナス1日から常用薬に加え頓服の大腸刺激性下剤も内服していたが、排便マイナス3日までオリゴ糖と常用薬のみ内服に変更。排便マイナス3日で浣腸あるいは排便とし、データ収集を行った。当初は対象者を1人選定し、2週間に1度の評価、見直しを行った。オリゴ糖の提供方法は、その方の体重に合わせて許容上限量を算出し、おやつ飲み物に混ぜて1日1回服用してもらった。効果が出すぎる場合は徐々に使用量を減らし調整した。

### 取り組みの結果

#### 自然な排便を取り戻し、介護負担を軽減

現在累計21名の方を対象に取り組みを行ったところ、17名は頓服の大腸刺激性下剤を使用せず、自力で排便ができるまで改善された。また長期間かかったが、常用薬として下剤を服薬されていた方が、服薬無しで排便できるようになった方も数名おられる。その結果、頓服の大腸刺激性下剤を使用していた場合は便秘対応に追われていたが、その回数が減り、介護負担が軽減した。また、ご利用者の負担も同時に軽減され、夜間良眠されることにより、生活の質が向上したと考えられる。

#### 研究大会発表内容

##### オリゴ糖による苦痛の少ない排便コントロール

～排便における介護負担の軽減～

特別養護老人ホーム 横塚荘 / 吉永 寿和子

詳しくは  
こちら



#### Commentator's message

介護に関わる職員みんなが常にアンテナを張り、ご利用者のためにできることを考えることが、その方の健康や暮らし、生きる権利あるいは幸せな生活を実現していくことにつながると改めて感じました。単に水様便から普通便になるという経過だけではなく、本人の意思通りに体の機能が動いていくこと、栄養素や水分がきちんと吸収されることで健康につながるなど、様々なところで色んな効果が現れ、生活にも変化が生まれているのではないかと思います。

大阪健康福祉短期大学 介護福祉学科 / 鴻上 圭太 教授



## 褥瘡の新規発生、再発防止に対する取り組み

CORPORATION 社会福祉法人 悠人会  
 FACILITY 特別養護老人ホームベルライブ  
 POSITION ユニットリーダー  
 NAME 堀西 倫正さん

### 取り組みのきっかけ

#### 早期対応で褥瘡予防

2021年度の当施設の褥瘡発生者は5名であった。当施設での主な褥瘡の原因は、状態の悪化や栄養不良であり、ターミナル期に伴う褥瘡発生が多く見られた。褥瘡に至る前に早期に対応策を専門職で検討することで、褥瘡の新規発生・再発を予防できるのではないかと考え今回取り組みを行った。



### 取り組み内容

#### 具体的なケアで新たな発生を防止!

当施設の褥瘡発生リスク評価に、ブレーデンスケール評価を用いてアセスメントしているにも関わらず、活用が不十分であった。そこでブレーデンスケール評価の項目に具体的なケアを充てることで、ケアを見直すタイミング・ケア内容を見直す項目を明確にした。ブレーデンスケール評価で17点以下の場合、体圧測定実施後のポジショニングやベッドマットの変更、離床時間の検討などを実施し、新たな褥瘡発生の予防を図る。また、体圧のみに捉われず、排泄の状況や湿潤、栄養補助食品の検討など総合的なアプローチをすること等が挙げられる。



### 取り組みの結果

#### 早期ケアで再発予防、ブレーデンスケールで状態変化を把握

ブレーデンスケールを基にケアの見直しを行ったことで、ブレーデンスケールの評価結果により身体の状態変化の傾向をつかむことができた。その結果として、早期にブレーデンスケールに基づいた褥瘡ケアがチームで行えるようになった。また、ターミナル期前の傾向として食事が低下し、臥床時間が増加し体動が減少する。ターミナル期直前の褥瘡の進行スピードは速いため、状態変化のタイミングを見逃さず早期にケアの介入を実践していくことで褥瘡の発生が予防でき再発の予防にもつながった。

#### 研究大会発表内容

##### 褥瘡ケアを見直すタイミングを明確化

##### 褥瘡を未然に防ぐ

状態変化時	ブレーデンスケール
使用オムツの変更時	湿潤
離床時間の変化	活動性
寝返りの有無	可動性
食事形態、提供量の変化時	栄養状態

詳しくは  
こちら



#### Commentator's message

ブレーデンスケールを用いて、きちんとエビデンスを以て実践しているところが素晴らしいと思いました。介護の仕事はやろうと思えば、限りなく仕事が増えていく中で、効率的な支援の方法を検討していくことが必要になります。しっかり分析して介護を行っていくためには、医療や介護職などの多職種による観察力も必要であり、各々の観察後にチームで情報を集めてそこで分析していくという、多職種連携の賜物ではないかと感じました。

大阪保健福祉専門学校 / 藤原 孝之 教務部長

## ～車椅子から椅子への生活～

CORPORATION 社会福祉法人 晋栄福祉会  
 FACILITY ケアホームちどり  
 POSITION 介護職員 生活相談員  
 NAME 兼田 みずきさん 森嶋 淳さん



### 取り組みのきっかけ

#### 多職種連携で生活の変化を

ご入居当初、ほとんど寝たきり状態であったご入居者が、介護職員等の多職種が関わることで車椅子に座って過ごせるようになられ、椅子での生活に変化していくという意欲の向上が見られたため。



### 取り組み内容



#### 4つの取り組み

- ・布団上での生活から座っての生活時間を増やす。
- ・おむつでの排泄からトイレでの排泄へ。
- ・座って安心できる入浴サービスを提供する。
- ・誤嚥予防を含め、椅子で食事を楽しめる環境を作る。

### 取り組みの結果

#### 知識と技術の向上を図って快適な生活をサポート

- ・トイレでの排泄により、不快感が軽減された。
- ・他の方と一緒に食事を摂る環境ができた。
- ・正しい姿勢で食事を摂ることで、誤嚥のリスクが軽減した。
- ・ご自宅では入れなかったお風呂に浸かることができ、ご本人の満足度も向上した。
- ・スタッフ等他の方との会話も増え、普段の表情が豊かになった。
- ・ご本人から「もっと歩けるようになりたい」と生活意欲の向上につながった。



#### 研究大会発表内容



令和4年9月

詳しくは  
こちら



#### Commentator's message

車椅子は介護をするうえで非常に重要なアイテムですが、今回の発表を通して、必要以上に多用してしまうことで、保持されている安心感に慣れてしまい、椅子に座ることが難しくなると分かりました。椅子に座って食事をすることで誤嚥のリスクを低減し、トイレに座ることもでき、立ち上がりの動作にもつながっていくなど、様々な点に効果が生まれるため、「座る」は介護の中で非常に大事なキーワードであり、学習を重ねていく必要があると思いました。

大阪健康福祉短期大学 介護福祉学科 / 鴻上 圭太 教授

## 安楽なポジショニングで 快適な毎日を！

CORPORATION 社会福祉法人 聖徳園  
 FACILITY 特別養護老人ホームひらかた聖徳園  
 POSITION ユニット介護職員 ユニット介護職員  
 NAME 乾 静香さん 小篠 加奈さん



### 取り組みのきっかけ



#### 正しいポジショニングで快適な生活を

近年、ご入居者の介護度が高くなり、自分で身体を動かすことができない方や関節の拘縮がある方が多くなってきていることから、快適で安定した姿勢や、活動しやすい姿勢を提供するポジショニングの重要性が高まってきている。昨年5月、クッションの老朽化のため！社のクッションを導入したが、職員によってクッションの使用方法やポジショニングについての理解に差異があったことから、正しく・有効的に使うことでご入居者にもっと快適に過ごしていただきたい！と考へ、臥床時の姿勢について一人ひとりにあったポジショニングの方法を検討することとした。

### 取り組み内容

#### ポジショニング改善プロジェクト、成果報告！

1. メーカーとの勉強会、意見交換会
2. ポジショニング体験
3. 職員間での意見交換会
4. ご入居者の状態観察・クッション使用

→ご入居者4名にご協力いただき、臥床時の姿勢について一人ひとりにあったポジショニングの方法を検討。「褥瘡の防止」「呼吸・循環機能の維持・促進」「筋緊張の緩和と関節の変形拘縮の防止」「安楽でリラックスした姿勢の提供」につながったケースについて実施結果の報告。

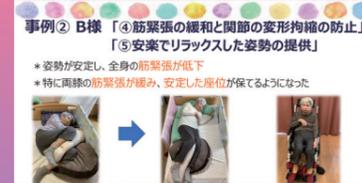


### 取り組みの結果

#### ポジショニングの向上と知識の共有に努める！

- ・ポジショニングに対して意識が低く姿勢の崩れに気づけない職員や、統一した対応ができていないことがある。コロナ禍で外部業者の施設への出入りを制限しているが、研修の機会を継続して持ちたい。
- ・ポジショニングはご入居者の意向を尊重しながら実施するため、納得していただく姿勢を見つけるのに時間がかかり、改善に至っていないケースがある。エビデンスに基づいた説明を行い改善に向けていきたい。ご入居者の大半は予防的にポジショニングの見直しが必要。今後の変形拘縮などのリスクを抑えることに努める。正しく、有効的に使うことでご入居者に安楽な姿勢で快適に過ごしていただけるようポジショニングの知識、技術の向上に努める。

#### 研究大会発表内容



詳しくは  
こちら



#### Commentator's message

ポジショニングは現場で応用が求められるため、座学で理解することは難しい。学んだことを、まずは実際に自分たちで体験し、改善のアイデアを出していくところが良かった。また、事例にあったHugなどの福祉機器や介護ロボットを併用することによって、ご利用者の安全と介護者の体を守ることもつながる。今後、ご利用者への効果を発揮するために、職員間でテキスト等を用いて見える化し、ケアの方法の統一化をめざしてほしい。

大阪保健福祉専門学校 / 藤原 孝之 教務部長

# 子ども食堂について 社会福祉法人が実践する SDGsの取り組み

CORPORATION 社会福祉法人 悠人会  
FACILITY ベルファミリアデイサービスセンター  
POSITION 主任  
NAME 竹田 駿さん



## 取り組みのきっかけ

### SDGs達成に挑戦！地域の中核施設として社会貢献

地域の中核施設として、介護施設で実践可能なSDGsへの取り組みを行うために、施設内でプロジェクトチームを発足。プロジェクトチームにてSDGsの17つの目標のうち施設で取り組める内容を検討し、「貧困をなくそう」「飢餓をゼロに」「すべての人に健康と福祉を」「住み続けられるまちづくりを」「パートナーシップで目標を達成しよう」の目標を達成するために活動を行い、子ども食堂の開催をめざすこととした。



## 取り組み内容



### 地域のニーズに応え、安心して参加できる子ども食堂

子ども食堂の開催に向け、自治会や社会福祉協議会と連携し地域の実状について把握。貧困や飢餓という問題が少ない地域性であり、新型コロナウイルスにより地域で集まれる場所がなくなったということが課題となっていた。現在、求められている地域ニーズとして地域住民が安心して集まれる場所の提供であると考え、イベント型子ども食堂を企画・開催することとした。実施内容は食育の推進やレクリエーションの体験を実施。感染対策のため対象校区を限定し事前予約制とした。また、人数を分散するために1時間で入れ替えをする2部制とした。

## 取り組みの結果

### 地域とともに笑顔あふれる子ども食堂を実現！

第1回は23組67名が参加。第2回は20組57名が参加。実施内容としては子どもだけでなく大人も楽しめる内容を実施。第1回の開催はボランティアを募集せず職員のみで行ったがスムーズに運営できなかったこともあり、第2回はボランティアを募集し学生16名、一般1名のボランティアにて運営を実施。参加者へのアンケートの結果は「子どもの喜ぶ顔を見られて良かった」「親子で楽しめた」等と好評な意見ばかりだった。職員も普段と違う雰囲気の中楽しみながら運営することができた。地域のニーズに合わせた子ども食堂を開催することで、地域のにぎわいづくりになっている。

## 研究大会発表内容

### 子ども食堂について

社会福祉法人が地域で実践するSDGsの取り組み

社会福祉法人 悠人会  
ベルファミリアデイサービスセンター  
竹田 駿

詳しくは  
コチラ



## Commentator's message

地域との信頼関係をベースに実施している点や、食育や相談窓口など教育と福祉的な機能をお持ちなところが良かった。また、多世代いろいろな人との交流を前提に、「誰でも入っていいですよ」という理念があるところや、しっかりパートナーシップという形を入れ込んで実践しているところも良かった。今回の発表は、理念から実践まで全部網羅されているため、今後、子ども食堂を始めたい方のモデルになっていくと思う。

大阪城南女子短期大学 現代生活学科 / 前田 崇博 教授

# ゴミが散在している環境の中で、 不登校になっている父子家庭の 子どもたちの支援

CORPORATION 社会福祉法人 もくせい会  
FACILITY ケアハウスきんもくせい  
POSITION 生活相談員 CSW デイサービス 統括責任者  
NAME 石井 智行さん 村山 慶さん



## 取り組みのきっかけ



### 家庭の困難に立ち向かう育児支援を提供

当施設では交野市から養育支援訪問育児援助・家事援助事業の委託を受けている。今回は父親の借金で貧困に陥り生活が成り立たず、心身が不安定となり子育てがおろそかになり、子どもたちが不登校になっているという相談があった。

## 取り組み内容

### 家族の幸せのために必要な支援を

父親の仕事や借金等により生活環境が崩れていた。その環境を整えるために大阪しあわせネットワークの社会貢献基金を活用し布団等必要な物品を購入。また不登校の子ども二人が登校できるように行政・子育て支援課、教育委員会、学校、訪問介護等各関係機関と役割を決め連携しながら支援を進めた。仕事と子育ての両立ができるように父親の精神的支援も行った。



## 取り組みの結果



### 多職種連携がもたらす伴走型支援

CSWとして援護を必要とする父親と子どもたちの課題を解決するために、関係機関と連携しネットワークを強化したケースである。結果として、父親は子どもたちとの時間を作り、子どもたちは父親に手作りのご飯を作るようになり、学校にも行くことができた。この父子家庭が一步前へと進むことができたのは、役割分担を決め各関係機関と連携したことで伴走型支援ができたためであり、多職種の必要性を改めて感じた。

## 研究大会発表内容

### 高齢者施設のCSWが 子どもの支援にどう関わったか

ゴミが散在している環境の中で、  
不登校になっている父子家庭の子どもの支援

詳しくは  
コチラ



## Commentator's message

包括的支援体制とは実際どうやって行うのかを分かりやすく示された事例です。当事者の思いをきちんと捉えて、それを関係者でしっかり共有し、長期目標を立てつつ役割分担を行って進められた点が素晴らしいと思いました。もともと高齢者施設でいらっしゃるの、子どもの支援に関わることは、実は少し専門外なのかも知れませんが、そのようなちょっと背伸びをする、視野を広げることで、支援につなげ、役割分担が生まれていくことがすごく分かりました。

大阪府福祉部地域福祉推進室地域福祉課 / 谷岡 伸子 参事

## 地域支援事業の可能性 ～ソーシャルワークのおもしろさ～

CORPORATION 社会福祉法人 八尾隣保館  
FACILITY 地域支援事業なないろ  
POSITION 在宅統括マネージャー  
NAME 久保田 佳宏さん



### 取り組みのきっかけ

### 地域共生社会をめざす、断らない相談支援

2021年4月に法人内で地域支援事業なないろがスタート。以前より、レスキュー事業や居住支援法人、中間的就労事業等の地域公益事業を積極的に実施していたが、新たに法人後見や食支援活動等も進めることになった。「高齢者」や「障がい者」、「子ども」といったカテゴリー別で縦割りするのではなく、「地域共生社会」をテーマにして断らない相談支援や伴走型支援をめざすことになった。法人内の高齢部門や児童部門の部署からメンバーを集め、それぞれのスキルやノウハウを活かせるよう、対話を進めている。地域を支援することが我々の使命であり、社会福祉法人の存在意義となると考えている。



### 取り組み内容



### 地域共生のため、さまざまな支援に全力で取り組む

レスキュー事業では八尾市内の他の法人との連携も強め、オール八尾での支援体制を整えている。家電や家具、生活用品の循環も行い、「もったいない物」と「必要としている人」のマッチングも図っている。居住支援法人としては年間100件近い相談を受け、半数近い数の物件成約につながっている。また、大阪府において第一号となる『法人後見』を受任し、成年後見制度を進めている。食支援活動としては、「全国食支援活動協力会」に所属し、寄贈の食材や支援物資を八尾市内の子ども食堂さんへ配布する活動も進めている。

### 取り組みの結果

### 地域との連携で新たな可能性を広げる

様々な地域支援事業を進める中で、連携の大切さや必要性を感じている。また、新しいつながりもでき、活動の幅が広がってきている。今までには出会ってなかった人やNPO法人さんともつながり、新たな事業等の模索もできている。八尾市や社会福祉協議会、他の社会福祉法人とも連携が深まっている。相談の入口が「居住」や「食」、「困窮」であっても、伴走型支援の進め方はほぼ同じものだということも学んでいる。その中でソーシャルワークの難しさや、ダイナミックな部分、おもしろさも感じている。そのことが職員の育成や定着、モチベーションアップにもつながっているとも感じている。



### 研究会発表内容

5. 今後の展開について

- ▶ 信頼 おせっかい（節度ある介入）日本一へ
- ▶ 創造 新しい事業への挑戦と深化
- ▶ 貢献 『やおやおや』になろう！

詳しくは  
コチラ



### Commentator's message

八尾隣保館を中心とする八尾市内の社会福祉法人は、チームビルディングのノウハウを持っており、ネットワークあるいは地域包括ケアシステムの先進的な取り組みであり、社会福祉法が改正され重層的な支援が求められるなか、全国的にも参考になるモデルだと思います。また、子ども食堂に対する「後方支援」という言葉を使った事業を展開し、主体性はしっかり子ども食堂において後ろでバックアップしているところも、ソーシャルワークの王道だと感じました。

大阪城南女子短期大学 現代生活学科 / 前田 崇博 教授

# ～福祉の未来を考える～

## 「福祉介護人材対策プロジェクト」の取り組みのご紹介

この大阪老人福祉施設研究大会の企画・運営は、大阪府社会福祉協議会 老人施設部会の中に設置しています。福祉介護人材対策プロジェクト(以下、「人材プロジェクト」という)が担いました。(令和4年度のメンバーは18人+相談役+事務局で構成しています。)

### 人材プロジェクトの目的

- 1 高齢者施設で働く職員の確保や、定着促進・離職防止、スキルアップ等の育成に向けた取り組みを推進することが目的です。
- 2 新たな切り口の実践を行い、その情報発信を通して、福祉の未来を考える人材の発掘・創出・育成をめざします。



### これまでの具体的な取り組み

#### 「働く職員のインタビュー冊子」の作成

学生向けに介護職の魅力やPRするために、20代の現役職員をモデルに選定し、趣味と仕事の両立をテーマにしたインタビュー雑誌風に仕上げ、少し先の自分の将来に思いを馳せて、介護職への期待も抱いてほしいとの思いで制作に取り組みました。

#### 「オンラインカフェ」の開催

主に若手職員を対象に、職員の定着支援や離職防止を目的として、Webによるカフェのような雰囲気の中で気軽に参加しやすい研修会を企画。企業や施設職員による講演会や、参加者同士が自由に語り合う場等を開催しました。

#### 「地域・学校との連携」推進

地域や学校・学生等とつながり、様々な取り組みを展開。福祉・介護に関する出前授業や、防災訓練等の活動と一緒に企画・実施することを通して、福祉についてともに考える機会を持ちました。また、研究大会での発表を行うなど、福祉・介護の専門職の育成だけでなく、地域課題にチャレンジしてもらえ人材育成に努めています。

#### 「講師BANK」の導入

自施設の内外で研修講師等として活躍している会員施設の職員が、講師BANKに登録し、会員施設や関係機関・団体の講師を担うことにより、研修が受けやすく・依頼しやすくなる、職場内研修の企画の参考にしていたく等を目的とした仕組みを導入しました。

### 研究大会 について

過去、会員施設間の取り組みの共有や職員育成を目的の中心にしていましたが、平成30年度からは福祉関係者をはじめ教員や学生などたくさんの方々に知っていただくことを目的に、発表スタイルをプレゼン方式で行う「ジョブズスタイル」に変更して開催しています。高齢者施設の先進的な取り組み、現場のカッコ良さを正しく伝えるために、このスタイルにこだわっています。これからも、多様な実践の情報発信、学び合いを通じて、福祉・介護の魅力の向上に努めます。

### 人材プロジェクトでは、次のことに取り組んできました

#### 企画

研究大会の骨子、発表者募集、コメントーター学識者への協力依頼、タイムスケジュールの検討、(株)マイナビとの連携、会場の選定、動線の検討、会場担当者との打ち合わせなど。

#### 広報

チラシ案の作成や制作業者のコンペの実施、鉄道会社へポスター掲示の依頼、大学や短大、専門学校、職能団体等への協力依頼、実施報告書の検討など。

#### 運営

研究大会当日のスタッフとして、発表者のサポートや舞台進行の補助、来場者の受付・誘導など。

これからも、人材プロジェクトは、福祉・介護の魅力を発信し、いま働いている福祉・介護職の方の定着・育成のための取り組みを行っていきます！